

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370561

研究課題名(和文) 英語における目的語移動と左周縁部に関する通時的研究

研究課題名(英文) A Diachronic Study of Object Movement and Left Periphery in English

研究代表者

田中 智之 (Tanaka, Tomoyuki)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：20241739

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語史における目的語移動の歴史的発達について調査し、その調査結果をvP領域の左周縁部における機能範疇の階層構造の観点から説明を試みた。目的語と副詞の相対語順に関するデータより、肯定目的語と数量目的語がvP領域の左周縁部における異なる機能範疇、具体的にはTop(ic)とFoc(us)の指定部にそれぞれ移動すると主張した。そして、目的語移動の消失を動詞句内の基底語順の変化、およびvP領域の左周縁部における機能範疇の消失と関連付けて説明することを提案した。

研究成果の概要(英文)： This project has investigated the development of object movement in the history of English and attempted to account for the results of the investigation in terms of the hierarchical structure of functional categories in the left periphery of the vP-domain. From the data on the relative order between objects and adverbs, it has been claimed that positive objects and quantified objects move to the specifiers of different functional categories, namely, Top(ic) and Foc(us), in the left periphery of the vP-domain. Moreover, the loss of object movement has been argued to be related to the loss of Top and Foc in the left periphery of the vP-domain, as well as the change in the basic word order within VP.

研究分野：英語学

キーワード：目的語移動 左周縁部 vP領域 肯定目的語 数量目的語 機能範疇 基底語順

1. 研究開始当初の背景

(1) 英語史における最も顕著な統語変化の1つとして、「目的語・動詞」語順から「動詞・目的語」語順への変化が挙げられ、英語の各時代における動詞と目的語の相対語順について多くの研究がなされてきた。先行研究において「目的語・動詞」語順としてひと括りにされている初期英語のデータをよく見てみると、目的語が副詞に後続する事例、および目的語が副詞に先行し副詞が目的語と動詞の間に介在する事例などが見られる。このような現象が存在することは知られているが、これまで言語事実の指摘に留まっており、生成文法等の言語理論に基づく研究がほとんどないのが現状である。一方、類似の現象はドイツ語等の現代ゲルマン語において観察されており、目的語が副詞に先行する事例は、節の中間領域(middle field)への目的語移動、かき混ぜ(scrambling)として分析されている。

(2) Rizzi (1997), Cinque (1999)を皮切りとして、統語地図作成法(syntactic cartography)のプロジェクトが推進され、CP, TP, vP 領域の左周縁部(left periphery)に豊かな機能範疇の階層構造が存在することが明らかにされている。CP 領域の左周縁部に関する研究が最も盛んであるが、近年では節の中間領域である vP 領域の左周縁部についても研究が進んでおり、例えば Jayaseelan (2001)は、vP 領域の左周縁部に焦点や話題に関わる機能範疇を仮定することにより、現代ゲルマン語における目的語移動を分析している。

2. 研究の目的

このような学術的背景を踏まえ、本研究では、これまであまり注目されてこなかった、英語史における節の中間領域への目的語の移動現象について、目的語と副詞の相対語順を中心に電子コーパスを用いた調査を行い、その歴史の変遷を明らかにすることを目指した。そして、英語以外の現代ゲルマン語やスカンジナビア語における類似の現象と比較しつつ、最近の生成文法理論における統語地図作成法の研究成果、特に vP 領域の左周縁部における機能範疇の階層構造の観点から、初期英語における目的語移動の特性、およびその歴史の変遷について理論的説明を試みた。

3. 研究の方法

(1) 初期英語に見られる目的語移動の分布を明らかにするために、まず電子コーパスを用いて、目的語と副詞の相対語順を調査した。その際、語順変化に関する先行研究において目的語の種類が重要な役割を果たすことが指摘されているので、目的語を数量目的語(many books, nobody など)と肯定目的語(代名詞目的語と数量目的語を除く通常の目的語)に分類した。副詞については、比較的高い位

置に生じる時間副詞と、比較的低位位置に生じる動詞句副詞(状態、程度、場所、方向など)に分類して調査を行った。

(2) 上記の調査により明らかとなった、初期英語の目的語移動について、vP 領域の左周縁部における機能範疇の階層構造の観点から、肯定目的語と数量目的語がどのような構造的な位置を占めるのかについて考察した。その際、現代ゲルマン語やスカンジナビア語における目的語移動の特性と比較しつつ、特に目的語の定性と副詞との相対語順に注目した。

(3) 英語史における目的語移動の消失については、主に vP 領域の左周縁部における機能範疇の消失と関連付けて説明したが、動詞句内の基底語順の変化や他動詞虚辞構文(transitive expletive construction)の発達など、その他の要因が果たした役割についても検討した。

4. 研究成果

(1) 古英語と中英語の電子コーパスを用いて、助動詞を伴う定形節において、目的語と副詞が本動詞に先行する(i)のような構造を持つ例を収集し、目的語と副詞の相対語順について調査した。この構造に絞ることにより、本動詞の移動の影響をなくし、目的語が CP 領域に移動している例を排除した。

(i) a. (SUBJ) AUX (SUBJ) {OBJ ADV / ADV OBJ} V

b. (SUBJ) {OBJ ADV / ADV OBJ} V AUX

このうち、古英語と中英語のいずれにも見られる(ia)の構造に関して、目的語の種類ごとに調査結果をまとめたのが表1, 2である。各欄の右側の数値は当該の構造の総数、左側の数値は目的語が副詞に先行する語順の数を示す。(POは肯定目的語、QOは数量目的語、TAは時間副詞、VAは動詞句副詞の略である。)

表1: PO

	O2	O3	M1	M2	M3	M4
TA	10/83	15/75	4/7	1/1	0/3	0/0
VA	56/129	53/122	25/45	1/3	3/11	0/1

表2: QO

	O2	O3	M1	M2	M3	M4
TA	0/20	0/17	0/1	0/0	0/0	0/0
VA	13/22	8/16	3/9	0/1	1/2	0/0

(O2: 850-950, O3: 950-1050, M1: 1150-1250, M2: 1250-1350, M3: 1350-1420, M4: 1420-1500)

この調査結果より、古英語において肯定目的語は時間副詞、動詞句副詞のどちらにも先行するのに対し、数量目的語は動詞句副詞に先行するが、時間副詞には先行しないことが分かる。そして、中英語になると当該の構造の総数は減少するが、M1まで同じ傾向が続き、M3を最後に目的語が副詞に先行する語順は消失した。

(2) 目的語移動の着地点については、現代ド

イツ語のかき混ぜに関する Jayaseelan (2001) を出発点とする。彼は vP 領域の左周縁部に話題に関する Top(ic)P と焦点に関する Foc(us)P、およびその間に副詞の位置を仮定し、話題として機能する特定の解釈を持つ目的語は副詞より上位にある TopP 指定部に移動し、焦点として機能する非特定の解釈を持つ目的語は副詞より下位にある FocP 指定部に移動すると分析している。本研究ではこの分析を修正した上で古英語に拡張し、以下に示される vP 領域の構造、および目的語移動の着地点を提案した。(ii)では TopP が FocP の上位と下位のどちらにも投射されるとする CP 領域に関する Rizzi (1997)の提案に従っており、2 種類の副詞の位置を仮定しているという点で Jayaseelan の分析とは異なる。

(ii) [TP SUBJ [T' AUX [TopP PO [Top' Top TA [FocP QO [Foc' Foc [TopP PO [Top' Top VA [vP v VP]]]]]]]]]

まず、数量目的語は不定表現であり通常は話題になりえないので、FocP 指定部に移動し焦点として機能する。その位置は 2 つの副詞の間にあるので、数量目的語が動詞句副詞に先行するが時間副詞には先行しないという事実が説明される。次に、肯定目的語は Foc を挟んで 2 箇所が存在する TopP 指定部に移動するが、上位の TopP 指定部に移動すれば時間副詞に先行し、下位の TopP 指定部に移動すれば動詞句副詞に先行する語順となる。

肯定目的語が TopP 指定部に移動することを裏付けるために、表 1 の古英語のデータを目的語の定性に基づき整理し直したが、その結果、肯定目的語が副詞に先行する場合には、後続する場合と比べて定名詞句の割合が高いことが分かった (O2: 84.8% vs. 67.8%, O3: 80.9% vs. 63.8%)。したがって、副詞に先行する肯定目的語は定性を持つ話題として機能し、その移動は vP 領域における話題化であると考えられる。現代ゲルマン語とスカンジナビア語における目的語移動においても、移動した目的語が特定の解釈を持つことが知られているので、(ii)の構造に基づく統一的な説明の可能性が開かれたと言える。

肯定目的語の着地点として 2 箇所の TopP 指定部を仮定すべき証拠として、時間副詞と動詞句副詞の両方を含む例において、肯定目的語が 2 つの副詞に先行することも、2 つの副詞の間に現れることも可能であったことが挙げられる。それぞれの例を以下に挙げるが、これは現代ドイツ語の目的語移動にも見られる特性である。

(iii) he wolde bæt rice **sona her** on  
 he would that kingdom soon here on  
 eorþan gesettan  
 earth build  
 ‘he would soon build that kingdom here on  
 earth’

(coblick,HomS\_46\_[BIHom\_11]:117.24.1491)

(iv) we willað **nu** lure spræcc **her** geendian;

we will now our speech here end

‘we will now end our speech here’

(cocathom2,ÆCHom\_II,\_41:308.138.7003)

(3) 肯定目的語が副詞に先行する語順は M3 を最後に消失したが、これは OV 基底語順の消失の帰結として説明される。Pintzuk and Taylor (2006)によれば、定形助動詞と肯定目的語を含む構造における OV 表層語順の割合が M4 に 1%以下となったので、この時期に OV 基底語順を設定する肯定証拠が不十分になったと考えられる。また、Pintzuk and Taylor が論じているように、肯定目的語は OV 基底語順においてのみ左方移動が許されるが、それは以下の構造形が存在しないことにより実証される。

(v) \*SUBJ AUX PO<sub>i</sub> V pronoun/particle t<sub>i</sub>



彼女らによれば、代名詞や不変化詞のような軽い要素には右方移動が適用されないため、それらが動詞に後続する構造は VO 基底語順となるが、この構造において肯定目的語が動詞に先行する例が見られないことは、肯定目的語が VO 基底語順において左方移動できないことを意味する。

以上の議論が正しいとすると、14 世紀に OV 基底語順が消失すると、肯定目的語の左方移動が不可能になったと分析される。これにより vP 領域に TopP を設定する肯定証拠がなくなったため、TopP 自体も消失したと考えられる。

(4) 数量目的語が副詞に先行する語順も M3 を最後に消失したが、Wurff (1999)等によれば、数量目的語が動詞に先行する表層語順は 15 世紀まである程度生産的であった。

(vi) ye haue eny thing spoken of my going to

Caleys (Paston 355.28)

これは VO 基底語順において数量目的語の左方移動が可能であったからであるが、16 世紀に入ると数量目的語を伴う OV 表層語順が減少したのに加え、FocP の設定に必要な別の肯定証拠も不十分となった。Ingham (2000)は、15 世紀に見られる OV 表層語順における数量目的語と、以下に例示される他動詞虚辞構文の主語が、同じ位置である NegP 指定部を占めると主張している。しかし、どちらも否定表現に限られないため、ここでの分析に従い、両者が占める位置は FocP 指定部であると仮定する。したがって、他動詞虚辞構文は FocP を設定する肯定証拠となるが、その頻度に関して中英語と初期近代英語のコーパスを用いて調査を行った結果、M4 では 35 例が見られるのに対し、E1(1500-1569)では 7 例に激減しており、E2(1570-1649)を最後に消失したこ

とが分かった。

(vii) there woulde some Iewes reprove this his  
doing (Udall, etc. Erasm. Par. / OED)  
したがって、16世紀に肯定証拠となる他動詞  
虚辞構文が衰退した結果、FocPが消失したと  
考えられる。これにより着地点が利用不可能  
となったため、数量目的語の左方移動、すな  
わち数量目的語を伴うOV表層語順も消失し  
たと説明される。

(5) 統語地図作成のプロジェクトにおいて、  
共時的言語研究に基づく数多くの成果が發  
表されているが、初期英語におけるvP領域  
の左周縁部に機能範疇の階層構造が存在す  
ることを示した本研究は、このプロジェクト  
に対する通時的言語研究からの貢献である  
と言える。また、英語史においてvP領域の  
左周縁部において機能範疇が消失したとす  
る提案が正しければ、機能範疇の階層構造が  
普遍的であるとする統語地図作成アプロ  
ーチにおける一般的仮定に対し(cf. Cinque  
(1999))、疑問を投げかけることになる。さら  
に、英語史における統語変化について、機能  
範疇の出現・創発という観点から考察した研  
究は多くあるが、機能範疇が消失したとする  
提案はほとんどない。したがって、英語史に  
おいて機能範疇の出現と消失の両方の事例  
が存在することになり、本研究は機能範疇に  
関する共時的・通時的変異の新たな可能性を  
示したことになる。

(引用文献)

Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and*

*Functional Heads*, Oxford University Press,  
Oxford.

Ingham, Richard (2000) "Negation and OV

Order in Late Middle English," *Journal of*  
*Linguistics* 36, 13-38.

Jayaseelan, K. A. (2000) "IP-internal Topic and  
Focus Phrases," *Studia Linguistica* 55, 39-75.

Pintzuk, Susan and Ann Taylor (2006) "The  
Loss of OV Order in the History of  
English," *The Handbook of the History of*  
*English*, ed. by Ans van Kemenade and  
Bettelou Los, 249-278, Blackwell, Oxford.

Rizzi, Luigi (1997) "The Fine Structure of the  
Left Periphery," *Elements of Grammar*, ed.  
by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer,  
Dordrecht.

Wurff, Wim van der (1999) "Objects and Verbs  
in Modern Icelandic and Fifteenth Century

English," *Lingua* 109, 237-265.

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

[雑誌論文](計5件)

Tomoyuki Tanaka "Object Movement and Left  
Periphery in the History of English," *JELS* 34,  
(日本英語学会第34回大会研究発表論文集)  
193-199. 2016 日本英語学会 査読有

田中智之「英語史におけるコントロール不  
定詞節の発達について」『名古屋大学文学部  
研究論集(文学)』62, 107-123. 2016 名古屋大  
学文学部 査読無

田中智之「古英語における目的語移動と左  
周縁部」『名古屋大学文学部研究論集(文学)』  
61, 71-88. 2015 名古屋大学文学部 査読無

Tomoyuki Tanaka "A Note on Modal Passives  
in Early English," 『近代英語研究』30, 71-77.  
2014 近代英語協会 査読有

Tomoyuki Tanaka "The Distribution of  
Verb-Object Order in the History of English: A  
Cyclic Linearization Approach," *Studies in*  
*Modern English: The Thirtieth Anniversary*  
*Publication of the Modern English Association*,  
251-266. 2014 英宝社 査読有

[学会発表](計3件)

田中智之「英語史における目的語移動と左  
周縁部」日本英語学会第34回大会招聘発表  
(2016年11月13日 金沢大学)

田中智之「英語史における不定詞節の構造  
と否定辞の分布」言語変化・変異研究ユニッ  
ト第3回ワークショップ(2016年9月7日 東  
北大学)

田中智之「目的語移動と左周縁部に関する  
通時的考察」名古屋大学英文学会第54回大  
会シンポジウム(2015年4月18日 名古屋  
大学)

[図書](計1件)

田中智之・中川直志・久米祐介・山村崇斗  
『文法変化と言語理論』開拓社 2016

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

田中 智之 (TANAKA, Tomoyuki)  
名古屋大学・文学研究科・教授  
研究者番号：20241739